

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

私の故郷、鈴鹿山麓には東海道五十三次の宿場町「関宿」と、屈曲路の城下町の「亀山」があり、子供の頃からのおおの町の親戚に度々遊びに行った。その延長上の町、京都山科や、津市にもよく出掛けた。「宿場町と城下町」。町の構成や家の造りは違つが、両町ともにぎやがで、春・秋の祭りには多くの人が往来した。田園育ちの私には街の活気が魅力で、好きであった。大学の卒業研究に進む際、得意だった特殊構造解析ではなく、スケールが大きく、息が長い都市計画を専攻したのも、少年時代に町歩きに慣れ親しんだ体験の影響かもしれない。

竹中工務店入社4年目、同社技術研究所特別研修生に選



ばれ、都市再開発手法の研究に携わった。当時はまだ少ない街区単位の都市再開発がテーマであり、その後増加が予測されたため、その有用性を追求し、実施可能な手法の提案が求められた。あくまで理想都市造りの研究と考えていたが2年後、元の設計部に戻るとすぐにその研究結果

## 都市社会の中に Eco・City

を実践に生かす仕事が続いてきた。

名古屋近郊の「豊田駅西地区再開発」と「刈谷市中部市街地再開発」の2件の計画を担当。本社開発計画本部の協力の下、現地調査や開発計画のコンセプトを創り、基本構想をまとめた。その際、主眼に置いたのが「Eco・City」※という考え方だった。昭和40年前後、全国各地での公害が社会問題化し、地球環境の保全に国民の意識が高まる中、何とか街づくりを環境問題と融合できないかと考え、生活環境の改善を含む各種の施策を街区計画に取り込み、一つの提案とした。

当時は、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）削減という概念はもちろぬ、今のようになぜゼロエミッションもなかったが、街区や建築構成材の自然循環リサイクルという考え方を積極的に導入した。この2件の再開発

が実際に造られた時期は同社を退社していたため、最後まで携わることはできなかったが、街づくりの中に地球環境対策を採り入れるという考え方は時代を先取りしたものであったと自負している。それが数年後に、都市計画部門でBCS賞や名古屋都市景観賞を頂いた「星ヶ丘テラス」（名古屋市中区）や医療機関の方々に評価を得ている「医療村・津メディカルモール」の設計に繋がったのかもしれない。

街や建築物はその時代の人々の考え方や文化を映すレガシーとなる。それだけに建築家は時代の変化に敏感でなければならぬ。一見、建築とは関係のない未来型社会事象でも何かを感じ取って設計に生かしていく。若い建築家の皆さんには、そうした未来を予想する感性を養ってほしい。

服部力氏（執務室より）

※Ecological city <urban> Renewal Design Theory (2019)